

## 書評 近代と現代を結ぶ歌人、中城ふみ子

— 加藤孝男・田村ふみ乃

### 『歌人 中城ふみ子 その生涯と作品』

クロスカルチャー出版

荒川 英之

本書の著者である加藤孝男氏と田村ふみ乃さんは共に短歌結社「まひる野」と表現文化研究会（表文研）に所属している。共著でありながら、中城ふみ子を短歌史へ位置付けてゆく論究（加藤）と作品鑑賞（田村）が一貫して自然な流れを示しているのは、共通の場で実作と研究に取り組む両氏の文学観の結びつきを基盤としているからであろう。本書を読めば、ふみ子の短歌のフィクション性、シュルレアリスムの構想等々、男性歌人が築いた近代短歌からの歴史的な前進に立ち会うことが出来る。

田村さんの第七回中城ふみ子賞の受賞を期に、お二人は中城研究を二人三脚で進めたようだ。その結実ともいえる本書は、二部構成となっていて、前半部（第一章から八章）のふみ子の生涯及び作品の短歌史への位置付けを加藤氏が論じている。昭和二十九年の「短歌研究」四月号に発表された「乳房喪失」（編集長の中井英夫の案で「冬の火花」を改題）と題する五十首でふみ子は一躍脚光を浴びた。加

精神面に一歩踏み込んだもので、対象に対する深い愛情を感じさせるが、だからといって、三十一歳で夭逝した女流歌人の悲劇性に凭れるような鑑賞態度ではない。ふみ子の生き方に対する正しい理解を根幹としたものである。一例を示せば、〈灯を消してしのびやかに隣に来るものを快楽の如くに今は狎らしつゝ〉の歌について、「死に瀕している自分を冷静に観察し、嘆くことはせず、まだ人間の真実を掘り下げることがあきらめていない」と述べられており、それが、時代を超えたふみ子の声のように響いてくるのである。

田村さんのこの鑑賞と、ふみ子の短歌を「冬の火花」に象徴させた加藤氏の思いが印象深い。「冬の火花」は、「乳房喪失」の原題であるが、この改題に対するふみ子の複雑な心境は、田村さんの編んだ巻末の年譜に詳しい。加藤氏は、短歌の冬の時代に打ち上げられた美しい火花にふみ子の歌を重ねている。「冬の火花」という題に改めて光をあてた点も、過去に埋もれたふみ子の声を伝えるものといえよう。

先に触れた社会性俳句運動が、論を中心に実作を試みる、いわば男性的なものであったのに対し、短歌の世界では、ふみ子の実作が女性的なものを解放させて現代短歌の可能性を示した。それが、文字通り一命を賭したものであったという点に、感銘と余韻を覚えるのである。

藤氏は、ふみ子の短歌の先進性について、「近代短歌と現代短歌の結節点にあつて、短歌の持つ詩的な機能を最大限に示して見せた」と記す。具体的にいえば、アララギ的な写真に対する価値観の転換を迫り、前衛短歌と呼応するものであったと加藤氏は明快に説いてみせる。若い女性歌人が、現代短歌の胎動を鮮烈に体現してみせたということになる。

余談であるが、昭和二十九年といえ、俳壇では社会性俳句の論議がややピークを過ぎた頃であろうか。ふみ子の短歌が「近代短歌のなかに長い間、押し込められてきた女性的なものを、一気に解放させてもいる」という加藤氏の見方は、社会性俳句が働く者の側、すなわち男性的な視点に立った運動であつたことに改めて気づかされる。

それは兎も角として、戦後短歌に「詩的な地平」を切り拓いたふみ子の足跡を加藤氏は重視する。本書によれば、その「詩的な地平」とは、一つには、現実と仮構の織り込まれた小説的な構想であつた。短歌や俳句へ虚構を持ち込むことに抵抗を感じる人は少なくないであろう。しかし、本書では、「短歌が現代文学であるのなら、小説と同じようにフィクション性があつてもおかしくないのである」という加藤氏の信念によって、ふみ子の手法は正当に評価されているのである。

後半部に見る田村さんの作品鑑賞は瑞瑞しく、ふみ子の

### 新刊

加藤孝男・田村ふみ乃著

### 『歌人 中城ふみ子 その生涯と作品』



「昭和三〇年代には前衛短歌運動が、歌壇を華やかにしていたが、二〇年代の終わりに、ふみ子はその短い生涯を燃焼させて、短歌に詩的世界を描き上げた。その短歌には、冷徹なリアリズムと象徴的な手法とが入り混じり、独自の世界を展開している。そんなことをこの本で論証している。」（あとがきより）

（注文は、

クロスカルチャー出版

TEL 〇三・五五七七・六七〇七

FAX 〇三・五五七七・六七〇八

（加藤孝男氏は歌人、東海学園大学教授、伊吹嶺名誉会員）

COVID-19に克つ  
本を読もう  
街に出ないぞ  
既刊本セレクト  
この本、読み落していませんか

**安田純生  
現代短歌  
用語考**



現代短歌に多用される特殊な表現の  
表現、古語、漢語、現代の日常語で  
あること、その意味、用法、注意、  
例、引用、索引、現代短歌の  
発展に貢献する。全頁、解説する。

H9刊 本体1900円

**安田純生  
歌ことば  
事情**



短歌の  
ことば  
事情

H12刊 本体1905円

**邑書林**

Tel 06-6423-7819  
661-0033 兵庫県尼崎市  
南武庫之荘 3-32-1-201  
younohon@fancy.ocn.ne.jp

たような感覚を覚える三首目、何れも詩としての歌の豊かさがある。

(令和2年9月10日 飯塚書店 税別一八〇〇円)

□吉岡生夫著『小谷博泰の百首』と  
きとして異界を讀む』

小谷作品の愛唱歌や注目歌を著者が受けとめ、コンパクトに纏められている。一例を挙げておく。

X字エスカレーターですれ違つた  
たあれば俺だよ もう見えない  
が 『季節の手毬唄』

この歌を「初句『X字』の『X』は上りと下りのエスカレーター、アル

## 歌集歌書を読む

鈴木英子

□服部みき子歌集『シンクレール』

三月の夜の散歩はほろ酔ひの地球の肩を借りつつゆかむ

「ほろ酔ひの」で一拍おいて読んで  
も、「ほろ酔ひの地球の肩」と読んで  
でも楽しい。大きな視点をこまやかに  
な表現で支える歌は爽快である。

旅しても何ほどもなしといふこ  
とを知るには旅をせよとや釈迦  
は

うつくしき老いを満ふるよこが  
ほは口絵写真のヘルマン・ヘッセ  
一首目。思考を巡らせるより入っ  
てゆくことの価値。イストラエルへの  
旅の連作に繋がるものを見られる。

フアベットの文字で比喩したところが  
凄いい。この交わるところで三句

『すれ違つた』のである。こういう  
のをドッペルゲンガーという。」と

説明する。小谷ワールドは独特で深  
い。ゆえに読者層が限定されるであ  
らう。本書はその魅力を引き出し、

広く一般にわかりやすく伝えている。  
令和2年10月10日 フォニックス出版 税別一〇〇〇円

□加藤孝男・田村ふみ乃著『歌人中  
城ふみ子 その生涯と作品』

中城ふみ子生誕百周年記念出版。  
鮮烈な歌を残し、女性短歌の先駆者

歌集名はヘッセの『デミアン』の主  
人公の名だが、他にも味のある人名  
の歌が印象深い第一歌集。

青紫蘇と荏胡麻 この世は似て  
非なるものの違ひを味はふとこ  
ろ

釘づけになる。なんて愉快なんだ。  
そして本当に味わうことは案外と難  
しいことだぞ、と口中を意識した。

(令和2年9月26日 六花書林 税別二〇〇〇円)

□小林真代歌集『ターフ』

冬枯れの木立の写真あらずして  
みづみづと樹木図鑑は立てり

いわき市在住の、ほとんどの歌が  
東日本大震災後に作られたという第  
一歌集。確かに図鑑の樹木は人間で  
言えば若者であり、老いたものは見  
当たらない。人間の視点への齟齬。

松林の塩害を説かれつつ昏きそ  
の松林わたしにもある  
その説かれる痛みにも内側の痛みが

であるふみ子をどこから読めばいい  
かという人の手引き書として役立つ  
のみならず、研究者も押さえておき  
たい好著。多くの文献に当たった上  
で記されていて、貴重な写真や作品  
の初出、略年譜が親切だ。

「短歌研究」五十首応募作品の衝  
撃、「乳房喪失」の構成、シユルレ

アリスムと戦後短歌、中城ふみ子と  
与謝野晶子、中城ふみ子と現代短  
歌、中城ふみ子の作品解説など9章  
から成る。気軽に読んで、ふみ子の  
核の部分に触れることができる。  
(令和2年10月31日 クロスカルネーター出版 税別一八〇〇円)

触れた。わたしにも、と。少しずつ  
発せられた声がまとまりとなり、ひ  
っそりと動じない一冊となった。

どこへでもゆけるおまへをどこ  
までも追ひゆかむ甲状腺検査は  
震災で天井が落ちてしまひしを

この店らしいと言へばそれまで  
二首目の店名が「JETT」。人の喪  
失も場所の喪失も畳みこむように大  
切に詠われ、震災前の時間がたまま  
ののように響く。「塔」所屬。  
(令和2年9月26日 青磁社 税別二五〇〇円)

□高柳蒨子著『短歌の酵母Ⅲ 青じ  
や青じや』

帯に「新しい歌論」とある。特異  
なのは「みんなが思い思いに歌を詠  
んだその結果のなかに傾向のような  
ものを見つける」方法である。「み  
んな」は万葉集から現代までの歌詠  
み。近現代短歌については、約十万  
首収録したデータベースがあるとい

『短歌』2021.3月号(河川書房刊)